

人名、土色、神名、古文書、地形など諸説あり

金田

今からはるか千五百年ほど前(五二七年)の出来事です。

大和朝廷は「新羅(朝鮮半島の国)」に奪われた

朝鮮半島南部の「南加羅(任那)」を復興するため、

近江毛野を大将とした六万の兵を送ろうとしました。

しかし、このとき「新羅」に味方する筑紫の国造「磐井」が、

天皇軍に逆らって、朝鮮半島に渡らせないように抵抗したのです。

朝廷は翌年の二月、反逆する「磐井」を征伐するため

「物部麁鹿火」を大将とした軍を差し向けます。

この戦いときに天皇軍に味方し、

大いに手柄を立てた人の中に、郡司「金田麿」がいました。

すでにこの時代には「金田」の地名があり「金田麿」が古代、金田の豪族で、

その名と地名が関連していると考えられています。

また、この征討軍に加わって田川に来ていた「天伴金村」が、

糸田の里で水不足に困っている村人を救うために、鉾を地面に突き立てたところ、

水がこんこんと湧き出したといひます。

これは「湧泉伝説」として今も伝えられ、

南木・神崎を経て金田を流れる「泓川」の由来にもなっています。

なお「金田」の名前の由来はこのほかにも、

先住民がこの地を開墾して水田を開いたときに、

酸化した鉄分を含んだ赤茶色の水が出たということで「金気田」と呼んでいた説や

稲荷神社の前身である「金田宮」にまつわる説、

「カマ」(崩壊地形、「カマ」の転で岸の崩れやすい川や急流の川)「タ」(場所を表す接尾語)

をはじめとする地形由来説など、いろいろな説があります。

神が先、神が崎

神崎

かつて日尾山(日王山)のふもとを流れる泓川は、雨の時期になればすぐに氾濫する暴れ川で、
水に覆われた田んぼに鶴が飛来するほどの湿地帯でした。

村人は山に登って木の実や草の根を採って飢えをしのぎながら、荒地を開墾してました。

その姿を見ていた見ていた産土神が村人を助けるために降りてきて、荒れた土地を耕しはじめたのです。

この産土神が耕した田んぼを「神田」といひ、

その「神田」を神が一番先に耕したので「神が先」「神が崎」と変化して「神崎」になったと伝えられています。

また、この産土神が日尾山にまつられていたことから

「この日尾神社から北側の崎にあたる集落」という意味で「神崎」になったという説もあります。

ちなみに、田に水を入れるところを「水口」または「田の口」といひます。

「神崎」にはかつて「田の口」という小字があり、どんなに飢饉の年でも「田の口に行けば米がある」と言われるほど、

豊かな稲穂を実らせていたそうです。これも産土神のおかげかもしれせんね。

天神様が詠んだ南の木

南木

「天神様」でおなじみの菅原道真。その道真公が都から左遷され、太宰府に向かう途中のことです。

道真公は、この地の貴船大明神の境内に立ち寄り、しばしの休息をとりました。

そのとき、南の方に生い茂った松の太木を見て、和歌一首を詠み、村人に与えたそうです。

その「南の木」にあやかって「南木」の名がついたと伝わっています。これは菅原神社の社伝にあるお話です。

また、貝原益軒が書いた「筑前国統風土記」では、糸田村に「たぎり」の湧水があり、

その水と流れを管理する場として「水城」があると記されています。現状とは少しそぐわないところもありますが、

これも水をたたる場所として「南木」の地名に何らかの関連があるとも考えられています。